

国連から指摘されてこのままでいいのでしょうか。

21世紀になって個人の人権意識は思いのほか前進した、と感じていました。女性に対しても、LGBTQに対しても、子どもの人権に対しても。ところが、それが集団となると、何も変わっていないかのよう。システムが機能していないと、起こるべきことは起こる。それがこのドキュメンタリーでは見事に証明されています。

滝山病院の院長、職員、1人1人が、どれだけ我々と違うとんでもない人たちか(確かに院長はとんでもない人ですが)、という視点で見ると学びは得られない。患者さんを虐待している滝山病院の職員は、集団心理において、そして再考されないシステムにおいて、私たちと同じ世界にいる、と思います。番組内で患者さんを滝山病院に送り込む役所の職員が出てきます。その平然とした口調が印象的でした。

私はNPO職員ですが、自治体からの委託業務を行うため、地方都市の福祉事務所の中に席をかまえており、日々ケースワーカーや福祉課職員の言動に接しています。

福祉事務所の中で職員たちが行っていることは、“相談に来た人を右から左に動かす”ことです。困っている問題を直接解決したり、展望を示すことではありません。生活保護という制度の中に動かしたり、医療機関や福祉施設に動かしたりします。専門性が無いからそれしかできないし、マニュアル化された流れ通りどんどん動かしていかないと、相談者がたまってしまうのです。そしてそれが自らの精神の健康を守る術にもなっています。

しかし窓口に来る当事者としては「また、テレビの芸人が自分の悪口を言うので、つらいんです。あと腎臓がすごく悪いみたいです。助けてください」と訴えることで役所が助けてくれると期待している訳です。そこにウソはありません。その時ご本人は「自分は一市民だ」と自認していても、精神症状が出てると認識していないかもしれません。市民として困っているから役所に相談に来た。でも、番組ではいつのまにか、逆に死なないと出られない病院に移動させられてしまう。それがこれまでも行われてきたのだし、家族も賛成しているし。

困っている個人、一人一人にとって、ご本人の困りごとこそがすべてです。

でも、対応する人にとっては、対象者がある限度数を超えると、一人一人がだんだん一緒くたに見えてしまう。勝手な言動してる人ばかり見ていると、逆にひとまとめにしたくなるのです。そうなるとこのグループはマニュアルにそってこの流れで、あのグループはあの流れで、という風にパッケージ化して考えてしまう。そうしないと大人数には対応できない。

ここにそもそものシステム構築の無理ががはっきり現れているのではないでしょうか。

1 人が相手を尊重しつつ対応できる人数って、現実に行われている実際の現場より、実はずっとずっと少ないのではないのでしょうか。

滝山病院の職員 1 人 1 人だって、もとは患者さんにやさしい人たちだったのかもしれませんが。それが多くの対象者を抱え、動かす先がなく、ここがどん詰まりなのだからと、「同僚もやっているのだから、自分も大丈夫だろう」と、目の前にたまっている患者さんをストレスのはけ口にしてしまう。ましてそれを止めるリーダーがいなくなると。これこそ集団心理です。

番組では、自分たちが非を犯した言い訳として「必要悪」という言葉が何度か聞かれました。「そんな言い訳だ！」と切り捨てるだけでは物事は改善しない。実際無理なシステムの上でやっているのだから。精神に障がいのある人をまとめて人里離れた施設に隔離するのも、これまた無理なシステムなのでは。

地域で住民が責任を分かちもって、本人や家族を支える方が、受け止める各個人の負担は減るのではないのでしょうか。そのようなシステムが機能したからこそ、イタリアはノーマライゼーションに一定の成果を得られたのでは。

国連から指摘されてこのままでいいのでしょうか。国は本気で地域の包括システムを考えてほしい。個人の意識は変わっても、集団心理はそう簡単には変えられない。変えられるのは先にシステム設計の方だと思うのです。

「死亡退院」よくこんな隠し撮りを集められたものです。青山ディレクターはじめ、制作陣には敬意を表します。